

ごん狐

きつね
にいみなんきち
新見南吉

青空文庫を元としています
参考 … ウィキペディア

なかやま 中山から、少しはなれた山の中に、「ごん狐」という狐がいました。ごん狐はひとり一人ぼつちの小狐で、しだのいつぱいしげった森の中に穴をほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。はたけへ入って芋をほりちらしたり、菜種がらの、ほしてあるのへ火をつけたり、ひやくしやうや うらて 百姓家の裏手につるしてあるとんがらしをむしりとっていたり、いろんなことをしました。(略)

その晩、ごん狐は、穴の中で考えました。「兵十のおつかあは、床についてうなぎが食べたいと言ったにちがいない。(略)ところが、わしがいたずらをしてうなぎをとって来てしまった。だから兵十は、おつかあにうなぎを食へさせることができなかった。そのままおつかあは、死んじやったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだらう。ちよッ、あんないたずらをしなけりやよかつた。」(略)つぎの日も、そのつぎの日も、「ごん狐は、栗をひろつては、兵十の家へもつて来てやりました。そのつぎの日には、栗ばかりでなく、松たけも、二、三本持つていきました(略)そのあくる日も「ごん狐は、栗を持って、兵十の家へ出かけました。(略)そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と、狐が家の中へはいったではありませんか。こないだうなぎをぬすみやがつた、あのごん狐めが、またいたずらをしに来たな。」ようし。「

兵十は立ちあがって、納屋にかけてある火縄銃をとって、火薬をつめました。そして足音をしのばせてちかよつて、今戸口を出ようとするごん狐を、ドンと、うちました。ごん狐は、ばたりとたおれました。兵十はかけよつて来ました。家の中を見ると、土間に栗が、かためておいてあるのが目につきました。

「おや」と兵十は、びつくりしてごん狐に目を落しました。

「ごん、お前だったのか。いつも栗をくれたのは」

ごん狐は、ぐつたりと目をうつろしたまま、うなぎを食しました。兵十は火縄銃をばたりと、とり落しました。青い煙が、まだ筒口から細く出ていました。

「ごん狐」

新美南吉(にいみなんきち)作。昭和七年(一九三二)発表の童話。小学校の教科書にも長い間取り上げられ、多くの人の心に残る作品となっている。

悪質ないたずらを続けていた、孤独な狐「ごん」が、兵十が獲ろうとしたウナギを奪ったことから、物語は始まる。ウナギは、病気だった兵十の母親のためのものだったが、その母親は亡くなってしまふ。

後悔したごんは、つぐないに盗んだいわしを兵十の家に投げる。しかし、こんどは兵十が泥棒と間違われてひどい目にあつたことを知り、それから山で栗を取ってきて、兵十の家に置き続けた。ところが、そのことを知らない兵十は、ある時家に忍び込んだごんを猟銃で撃ち殺してしまう。その後、栗を届けていたのが、ごんであることを知り、驚愕するとともに、深い悲しみに襲われるという物語である。

透明感に満ちた自然描写を随所に配しながら、ごんと兵十の心の擦れ違いと、言葉にならない触れ合いを描く。

ごんの行為を指して、加助が「そりや、人間じゃない、神さまだ」と話しているのを聞いたゴンは、残念に思いながらも、なお兵十にくりを届け続ける。一般的な善行の問題としてではなく、孤独な魂が、もう一つの孤独な魂に近づこうとする切なさを描き、人が持つ本質的な寂しさに迫る物語となっている。

作品は、ごんの性格描写、兵十との関係、抑制された感情表現などが美しく(繕)より合わされながら、最後に空にのぼつていく煙の中に、生きていくことの哀しみが表現されているように思われる。